Management Club Report

Sept.2004/Vol.21

Monthly Opinion　≪新リーダーシップ論（２）≫

８月４日に開催された「エグゼクティブリーダーシップセミナー／勇気あるリーダーの心」（株式会社ビジネスコンサルタント主催）のセミナー内容を中心に、歯科医院における新しいリーダーシップのあり方について２回に亘ってお届けしておりますが、今回はその後編と言うことになります。

■原点に立ち帰る

“ The Heart of a GUTSY LEADER ”のいよいよ核心に触れることになります。世界の経済を常にリードしてきたアメリカのビジネス界は、１９８０年代に大きな落ち込みを体験しますが、冷戦終結後、９０年代に入りますと情報技術の民間活用をテコに再び甦ります。その後、ＩＴバブルやテロ事件などを通じての落ち込みも繰り返されるなかで、様々な試行錯誤の結果、マネジメントスタイルやビジネスモデルに変化が加えられてきました。今、アメリカのビジネス界では「原点に立ち帰れ」という動きが出てきているようです。

「原点」とは何を指すのでしょうか。フライバーグとサンダースは、ビジネスを“ Purpose ”「目的」と“ Cause ”「大儀」という観点に立ってもう一度定義し直してみようと語りかけています。「目的」や「大儀」というのは、いずれも「何のためにそのビジネスをやっているのか？」という問い掛けですが、少しニュアンスが異なります。「目的」が現実的であるのに対し、「大儀」はより根源的です。つまり「大儀」とは、そのビジネスを行うことの意義を問うことになります。

「そのビジネスは意味のあることなのか」

この問い掛けは、ビジネスの存在価値そのものが問われる、なかなか厳しい問い掛けですが、それだけに非常に重大で且つとても怖いものです。ケビン・フライバーグはその恐怖を、人生の意味に対する問い掛けに重ねて次のような話をしました。

「私たち人間は、死に際して何を恐れるのだろうか？それは自分の人生の意味について自らに問い掛けることだ。死そのものは恐怖ではない。しかし、『自分の人生は果たして意味があったのだろうか？多少なりとも社会に貢献できたのだろうか？自分を迎えてくれた組織の役に立ったのだろうか？』この問い掛けに肯定的な答を出せないこと、それこそが恐怖なのだ。西洋人は墓石に人生を記録する。そのとき何と書かれたいだろうか。『有名なコンサルタント』『大金持ち』『莫大な資産を築いた』そのようなことではない。私は次のように記されたいと思う『天から与えられた小さな能力を社会に貢献させるため、○○とい